



2010年5月12日放送

漢方頻用処方解説 小青竜湯①

東海大学 東洋医学講座 准教授 新井 信

主な効能

まずは小青竜湯の主な効能効果です。保険適用エキス剤はいくつかの製薬会社から出ていて、その効能効果は、メーカーによって若干異なっていますが、おおむね気管支喘息、鼻炎、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、感冒における水様の痰、水様鼻汁、鼻閉、くしゃみ、喘鳴、咳嗽、流涙、気管支炎となっています。これらの適応症の中で、臨床で重要なものは、薄くて水のような痰を伴う咳、あるいは水のように透明でさらっとした鼻汁という症候で、これらが小青竜湯を用いるときの重要なポイントです。

処方の出典、処方名の由来

まず、原典を見てみましょう。小青竜湯の原典は『傷寒論』と『金匱要略』で、そこに全部で5つの条文が記載されています。

『傷寒論』太陽病中篇の条文は、小青竜湯の方意を知る上で重要です。「傷寒、表解せず、心下水気あり、乾嘔、発熱して欬し、或は渴し、或は利し、或は噎し、或は小便利せず、小腹満し、或は喘する者は、小青竜湯之を主る。」すなわち、「傷寒にかかり、桂枝湯や麻黄湯を用いても表証が解消せず、心下に水飲が停滞するのは、水気と寒邪が相打つためであり、それにより生ずる乾嘔、発熱、咳などの症状は定まった証であり、小青竜湯の主治である。それに対し、口渴、下痢、むせび、尿量減少と下腹部膨満、息切れなどの症状は、

時に現れ、時に現れない不定の兼証であり、これらの証を兼ねて現すのも、やはり小青竜湯の主治である。」という内容です。条文にある「心下水気あり」とは、必ずしも心下に振水音を証明するというのではなく、さまざまな症状が心下の水気と関連しているということを示したものです。

同篇には続けて、「傷寒、心下水気あり、欬して微喘、発熱、渴せず、小青竜湯之を主る。」とも記載されています。これは「傷寒にかかり、心下に水飲が停滞し、それで咳をして軽い息切れがし、表証がまだ解していないために発熱するけれども、体内に水飲があるために、咽が渇かないものは小青竜湯で主治する。」ということです。このように、小青竜湯には、表の邪を散ずると同時に、心下の水をさばく働きがあります。

また、『金匱要略』痰飲欬嗽病篇には「溢飲を病む者は当にその汗を發すべし。大青竜湯之を主る。小青竜湯もまた之を主る。」という条文があります。溢飲とは、水分が四肢に滞留して浮腫を呈する病態です。

さらに、同篇には「欬逆、倚息、臥するを得ざるは、小青竜湯之を主る。」とも記されています。「欬逆」とはかなり強い咳、「倚息」とは物に寄りかかって息をしている様子ですから、咳と呼吸困難が強くて横になっていられない状態、まさに気管支喘息の発作などに小青竜湯を用いる、ということです。

婦人雑病篇にも記載がみられます。「婦人、涎沫を吐するに、医反つて之を下し、心下即ち痞するは、まさに先ずその涎沫を吐するを治すべし。小青竜湯之を主る。」とありますが、これはあまり実際的ではないようです。

さて、この小青竜湯という名前の由来についてご説明します。小青竜湯の青竜というのは、中国の神話に出てくる四神の1つで、東方を守護する神のことです。青、あおは、五行説では東方の色ですが、その原義は青い山「青山」、青い林「青林」のように、緑色植物の色であり、本来は緑色だと考えられます。ですから、青竜の青も緑色で、麻黄の色から名付けられたものだと思います。その他の四神については、白虎は西方、朱雀は南方、玄武は北方を守護する神だとされています。ちなみに、私の生まれ故郷、埼玉県秩父市にある秩父神社の社殿に「つなぎの竜」という彫刻がありますが、これがまさに「青竜」だそうです。

生薬構成の漢方的解説（薬能）

構成生薬を考えてみましょう。小青竜湯は半夏、麻黄、芍薬、乾姜、甘草、桂枝、細辛、五味子の8味から構成されています。

麻黄と桂枝は發表剤で表証を解し、桂枝は水毒の上衝を抑え、麻黄は喘咳を治します。また、半夏、乾姜、細辛の3つは胃内停水を去り、芍薬と五味子は咳嗽を収め、甘草は諸薬を調和し、上衝した気を静め、組織の緊張を緩和します。これらを総じていえば、本方は心下の水飲を散じ、逆気を降ろし、表邪を解する作用を持つということになります。

本方の薬能は、このように構成生薬から考えることのほかに、本方を構成する最小ユニットとしての処方に着目すると臨床的に理解しやすいと考えています。すなわち、乾姜と甘草のペアです。『金匱要略』肺痿肺癰欬嗽上気病篇には、この2味から成る甘草乾姜湯という処方が掲載されていて、その条文に「肺痿、涎沫を吐して欬せざる者は、その人渴せ

ず、必ず遺尿し、小便数なり。」さらに、「これを肺中冷と為す。必ず眩し、涎唾多し。甘草乾姜湯を以て之を温む。」とあります。このように、乾姜と甘草のペアには、特に呼吸器系に対し、強力に温めて利水をはかる作用があります。ですから、小青竜湯が寒証の鼻炎、すなわち水のようなサラサラとした鼻汁が多量に出るものに対して有効であるのは、このペアを含んでいることから理解できると思います。そのような意味で、乾姜と甘草を含む他の処方を探してみると、小青竜湯の裏処方と言われる苓甘姜味辛夏仁湯はもちろんのこと、かつて肺結核に頻用された柴胡桂枝乾姜湯や、胸痺の処方である人参湯にも含まれています。さらに、半夏瀉心湯や苓姜朮甘湯などにも含まれることから、これらの処方にも同様の作用が期待できるかもしれません。

古医書における記載の紹介（江戸～明治・大正期）

古方の代表的処方の 1 つである小青竜湯は、江戸時代以降の古医書にも多くの記述が見られます。

代表的なものとして、吉益東洞『方機』の小青竜湯の項に「乾嘔、発熱して咳し、或は咳しかつ微喘する者、喘息する者、咳唾、涎沫を吐する者。」とあります。ここで言う咳とは、水っぽい喀痰とともに下気道から生ずる喘咳、すなわち咳を伴う呼吸困難と考えられます。この条文から察する限り、小青竜湯の呼吸器症状は主に下気道に起因すると考えられます。

浅田宗伯『勿誤薬室方函口訣』には、もう少し具体的な記載がみられます。「この方は表を解せずして、心下水気ありて咳喘する者を治す。また溢飲の咳嗽にも用ゆ。その人、咳嗽喘急し、寒暑に至れば必ず発し、痰沫を吐して臥すること能わず、喉中しわめくなどは心下に水飲あればなり。この方に宜し。若し上気煩燥あれば石膏を加うべし。」煩燥とは、もだえ苦しむことですから、そのような場合には石膏を加えると良いということです。

本方は現在、アレルギー性鼻炎の第一選択薬として有名であるにもかかわらず、調べてみると、意外にも古典には鼻汁に関する記載が少ないようです。内藤保定『古方節義』に「小青竜湯はもともと、風寒に傷られて寒が少なく、風が多いものに用いる方である。肺の臓には常に、水液が升れば清涕、つまり水様鼻汁となり、降って心下に留まれば水飲となって、あるいは熱し、あるいは冷え、あるいは渴し、あるいは小便不利など、種々の証を呈する。」という意味の記載が見られます。